風の砦

上

原田康子

田康子の砦（上）

新潮社

風の砦（上巻）
定価　一二〇〇円

印刷　昭和五十八年　六月二十日
発行　昭和五十八年　六月二十五日
著者　原田康子
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
162 東京都新宿区矢来町七一　振替　東京四―八〇八
電話　業務部03(266)五一一一　編集部(266)五四一一
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　加藤製本株式会社

© Yasuko Harada, 1983　Printed in Japan
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-341502-9 C0093

目次

序の章……5
夜の梅……10
女人渡海……45
刃……84
色は匂えど……133
菊の秋……162
手負い……191
ショルラとシセク……219
夢魔……257

装画・地图・挿画

佐多芳郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

風の砦（上巻）

序の章

嘉永六年（一八五三）八月二十九日、一隻の帆船が樺太（サハリン）南方の海上、アニワ湾に姿をあらわした。ロシアの海軍武官ネヴェルスキーのひきいる陸戦隊員七十数名を乗せた露米商会のニコライ号である。

八月とはいえ、陰暦のことである。北の海は荒れはじめていた。ニコライ号は船体をきしませながら、いちめんに白波の立つ湾の奥深くへと進んで行った。

ニコライ号が目ざしているのは、アニワ湾岸のクシュンコタンである。すなわち、かつての大泊（おおとまり）、現在のコルサコフである。クシュンコタンはアイヌの草小屋が並ぶ小集落にすぎなかったが、そこには日本人の建てた漁舎があった。

当時、すでに樺太南部の海岸には、日本人の開いた漁場が点在していた。松前藩が樺太の調査をなしたのは古く、寛永十二年（一六三五）藩士を樺太に派遣したのが、その最初である。以来、松前藩は樺太を自領と見なしてきたのであるが、日本人が頻繁に樺太に渡るようになったのは十八世紀のなかごろからである。かれらは交易のかたわら漁場を見立て、アイヌに漁法をおしえ、やがて

本格的に漁業を営むまでになった。寛政二年（一七九〇）には松前藩の手によって樺太南端の白主に交易所が設けられ、クシュンコタンと西海岸のトンナイに番屋が建てられた。

一方、ロシアの樺太への進出は、これよりおくれていた。十六世紀末、コサックの一団がウラル山脈を越えてシベリアに足を踏み入れて以来、ロシア人は東進をつづけていたが、慶安三年（一六五〇）黒竜江地方で清国兵と衝突し、ネルチンスク条約によって黒竜江一帯の地は清国の領土と確定した。南下をはばまれたロシア人は、進路を北に転じてベーリング海に達し、十七世紀の末にはカムチャツカを征服した。

当時の北洋は海獣の豊庫であった。ロシア人は海獣を追ってアレウト列島沿いにアラスカにまで進出、一方では千島をうかがいはじめた。日本人も宝暦四年（一七五四）に国後島に漁場を開き、こうして日露の勢力は千島において接触することになる。

寛政四年秋、ロシアの使節ラックスマンが、日本の漂民三名をともなって根室に来航した。北洋へ進出したロシアにとって、日本の港は寄港地として恰好である。ラックスマンは通商をのぞむ国書をたずさえていたが、むろん国書は徳川幕府の受取るところとはならなかった。

四年後の寛政八年、こんどは英国船が内浦湾へはいって虻田に碇泊した。アジア大陸の東岸を探検測量中の船で、翌年ふたたび内浦湾に来航した。北海道の沿岸に、しきりに外国船が出没するようになったのである。幕府は沿岸防備の必要に迫られ、蝦夷地を直轄支配した。寛政十一年、まず太平洋岸の東蝦夷地を仮上知、文化四年（一八〇七）にいたって蝦夷地全域を上知する。松前氏は居城・福山をあけ渡して、陸奥伊達郡をはじめとする小さな飛び地に移らねばならなかった。

ロシアは、日本との通商をあきらめなかった。文化元年、二度目の使節レザノフが長崎に来航した。しかし、これも幕府の入れるところとはならない。レザノフは翌春まで長崎で待たされたあげく、即刻退帆を命じられた。幕府のこの非礼は、ロシア船の千島、樺太襲来となって返ってきた。

利尻島をはじめ、千島と樺太の日本人の漁場がロシアの艦船に襲われたのは、文化三年と翌四年

の二回である。レザノフの命を受けた露米商会員による襲撃である。かれらは浦々を襲って家屋を焼き、出稼ぎ人を捕え、船舶に火を放ってオホーツク海に逃れ去った。クシュンコタンは、このときも真っ先に厄に遭った。

露米商会、いわゆるロシア・アメリカン・カンパニーの設立は、これよりすこし先の寛政八年である。露米商会はシベリアからアラスカにかけての権益を独占していた大会社で、日本との通商を強くのぞんでいたのもこの露米商会であった。

露米商会はアラスカにおける地歩を固めると、黒竜江沿岸でも活動をはじめた。まず、清国の許可を得て黒竜江の河口に出張所を設け、嘉永三年にいたって、河口近くにニコライエフスク府を建設した。ここまでくると、樺太は眼前である。露米商会は樺太の探検調査を行い、ロシア政府を動かして樺太経営の特許を得た。

ニコライ号は、こうして派遣された。日本人がはいりこんでいるといっても南端にかぎられており、しかも夏場だけのことである。クシュンコタンは、いわば出稼ぎの根拠地にすぎなかった。指揮官ネヴェルスキーはクシュンコタンを占拠して武装植民地を築き、そこを足がかりに樺太全島を手中にしようとしていたのだった。

ロシアの使節プチャーチンが、国境の協定と通商を求めて長崎に来航したのは、これよりわずか一箇月前、嘉永六年七月である。そのひと月前にはペリーが浦賀に来ている。プチャーチンはペリーにおくれをとるまいとして、急ぎ長崎に来航したのであるが、ロシア兵のクシュンコタン襲来も、こうした動きと無関係ではない。

ここに一通の報告書が残っている。ネヴェルスキーから東部シベリア総督ムラヴィヨフにあてた報告書である。

すでに日本に対して動作する米国人は、サガレン（サハリン）に向って注目せずとは予想するあ

たわず。すなわち米国人同湾に来たり、露国のいまだ占領せざるを見て、その要地を占領せずとも断言するあたわず。これ、この地点を占領せば、日本に対して著大なる権力を得、かつ全サガレンに威力を有するに至るべければなり。サガレンは、われに最も欠くべからざるところの石炭に富めり。

西欧諸国の植民地主義の波が、惰眠にふけっていた極東の小島国をゆさぶりはじめたのである。それは、明治維新へとつづく近代日本の苦悶の発端でもあった。

このときまでに、幕府は蝦夷地を松前氏に返していた。文化年間（一八〇四―一八）以後はロシアとの衝突もなく、松前氏の強い懇望もあって、文政四年（一八二一）直轄支配を打切ったのである。

クシュンコタンは、あっけなくロシア兵の手に落ちた。復領後、松前藩は毎年勤番の士卒数名を派遣していたが、ロシア兵が上陸したときは勤番の士卒は引揚げたあとで、越年の番人三十数名と若干のアイヌが残っていただけだった。

ロシア兵は番人らを威嚇して倉庫等を占拠、砲九門を据え、兵舎四棟と物見櫓を建て、周囲に厳重に柵をめぐらし、柵外には物置や浴場まで設けた。永住のかまえである。ネヴェルスキーは、あとを部下の将校にまかせて、基地の建設中にニコライ号で去った。番人らは、とうに逃げ去ったあとだった。

松前氏の居城・福山は北海道の南端にあった。松前藩が変を知ったのは、およそ半月後である。松前藩は幕府に急を告げる一方、二隊の藩兵を樺太へ送り出した。しかし宗谷海峡は、すでに冬の荒海と化し、松前藩兵は春まで渡航を見合わせねばならなかった。

翌春、クシュンコタンへ渡った松前藩兵は、ロシア兵に退去を求めた。ロシア兵は意外にもこれを受入れ、半月後には全員船で退去した。日本側との衝突をおそれたわけではない。松前藩兵の知るところではなかったが、半年前にトルコとの戦争がはじまったためである。クリミヤ戦争である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

英仏の二国もロシアに宣戦を布告し、英仏の艦隊は、ロシアの艦船を求めて、東洋の海域を遊弋中であった。

この年、安政元年（一八五四）三月、幕府は再度来航したペリーと、ついに和親条約をむすび、下田と箱館の開港を約した。一国に門戸を開いたうえは、他の国に門戸をとざす理由は失せる。同年八月、幕府はイギリスと和親条約を締結、おなじく十二月、ロシアと和親条約締結、長崎も開港ということになる。かたくなに国をとざしてきた幕府も、欧米諸国の武力のまえには、門戸をあけざるをえなかったのである。

箱館の開港に先だって、幕府は箱館奉行をおいた。松前藩は幕命によって、箱館と、その周囲の土地五、六里を幕府に返上した。

しかし、それだけではすまなかった。千島、樺太をふくむ広大な蝦夷地の警備を、わずか一万石の小藩にすぎない松前藩にまかせるわけにはゆかない。和親条約をむすんだといっても、樺太における国境は確定せず、ロシアとの紛争が起る可能性は、じゅうぶん残っていた。

安政二年春、幕府は福山を中心にした海岸三十余里を松前藩に残して、他は上知した。いったん返した蝦夷地を、ふたたび召上げたのである。

松前藩には代償として陸奥伊達郡築川、羽村山郡東根があたえられた。幕府は、松前領をのぞく蝦夷地の警備を仙台、秋田、弘前、盛岡の東北諸藩に命じた。

夜の梅

1

古島香織は、朝と夕とでは足取りがちがった。朝は軽く、夕べは重い。老人であれば、なんのふしぎもないが、彼はまだ二十六歳だった。

徒目付という職掌柄、出歩くことが多く、足はいたって丈夫である。健康な若い男が、夕刻になったからといって疲れをおぼえるはずはなく、事実、香織も肉体的な疲労とは縁がなかった。ただ、心がふさぐ。退けどきには、きまってそうなる。胸の中に砂でもつまったように心が屈し、自然、足取りも重くなる。ときどき彼は、緩慢な足取りに気づいて歩を早めるのだが、やがてまた、もとにもどる。家へ近づくにつれて、彼の足はますます重くなる。

ところがこの日は、いつものようではなかった。

香織の属している支配目付役所は城外の御会所の中にある。御会所には、支配目付役所のほかに、郡奉行詰所とか検地役所とか、藩のさまざまな役所がはいっていた。

この日、香織は御会所を出ると、足早に堀端を北へまわった。人気のない薬草園のかたわらを過ぎ、北の丸の下を通る。文字どおり、脇目もふらない。二月のなかばになっていたが、路上には雪

がまだ残っていた。歩きやすいはずはないのだが、そんなことには頓着しない。彼には、道をいそいでいるという意識すらなかった。

堀端を外れると屋敷町だった。中堅の家臣の住いが多い区域で、香織が訪ねようとしている支配目付・三上秀之助の屋敷もこの近くにあった。

香織は、ようやくわれに返って歩をゆるめた。

なにを一体あわてているのか。なにが頭を領しているというのだろうか。

日没には、まだまのある時刻だった。道をはさんで並ぶ武家屋敷の塀の、片側には日があたり、片側は翳っていた。片ほうには昼が残り、片ほうには夕暮れがおとずれているような気配である。

雪消の水たまりがところどころに光っていた。どこかで猫の声がした。使いにでも行くのか、老いた下僕が背をこごめて、かたわらを行き過ぎた。

いつもとなんのかわりもない、屋敷町のたたずまいである。蝦夷地出兵の決定が信じがたいほどだった。

秋田藩が他の東北諸藩とともに蝦夷地警備の命を受けたのは、およそ一年前である。藩は、勘定奉行・志賀猪三郎らを蝦夷地に派遣して、割りあてられた持場の調査を行った。その結果、おどろくべきことがわかった。秋田藩に割りあてられたのは、積丹半島カムイ岬から宗谷を経て知床半島突端にいたる沿岸二百数十里に加え、利尻、礼文の二島と北蝦夷（樺太）におよぶ長大な区域だったのである。

これは、太平洋岸の白老から択捉島までを割りあてられた仙台藩の持場の長さに匹敵する。伊達六十万石とおなじ距離を受持たされては、秋田藩は割が合わなかった。

秋田藩には、まえにも蝦夷地に兵を出した経験がある。文化年間、ロシア船が千島と北蝦夷を襲ったとき、やはり幕命で兵を送った。だが、そのときは沿岸数百里の警備などという途方もない話ではなかった。藩兵は箱館へ渡っただけですんだし、冬になるまえに帰国することができた。

こんどは、そうはゆかなかった。持場が長大なだけではない。期限のない、いわば恒久的な出兵である。

出兵に際しては、もとより幕府の援助は得られない。兵員の輸送、陣屋の建設、武器の準備、一切が藩の負担になる。でなくとも、藩の財政は苦しかった。天明、天保の饑饉の影響がいまだに尾を引き、参勤交代という出費を強いる制度もある。佐竹二十万石にとって、蝦夷地出兵の命は青天の霹靂にひとしかった。

秋田藩は、蝦夷地警備の免除を幕府に願い出た。非常の際に兵を出したいというのである。そんな願いが入れられるはずもなく、指図どおり守備につくようにとの老中・阿部正弘からの達書がとどき、その知らせを持った江戸藩邸からの飛脚が、この日城下に着いたのだった。

御会所にも、その話はすぐにつたわってきた。誰もが暗い顔つきになった。幕府も海岸全面の守備は無理と考えてか、駐屯地を何箇所か指定してきたということだったが、蝦夷地出兵にかわりはない。

「蝦夷地のどこへ行けというのだ」

「わからぬ。なんでも、奥の奥の、そのまた奥だという話だ」

そういううわさをするにしても、みなは声をひそめて話した。声を高めては、不謹慎だとでもいうような部屋の雰囲気だった。

香織は書面に目を落したまま、みなの話を聞いていた。支配目付役所の中では、香織は新参者である。香織が古島家の養子にはいり、舅・藤右衛門の家督をついでから一年にもならない。新参者の遠慮も多少はあったけれど、この役所に来てからの香織は、口数の少ない男にかわっていた。

朋輩たちは、出兵についてあれこれ臆測をはじめた。五百名くらいは出ることになるだろうと言う者もあり、いや、そんなには出せまい、百名か二百名くらいだろうと言う者もあったが、蝦夷地へ行くのは、身体強健な若い者であろうという点では、みなの意見が一致した。

「では、おれは行かぬな」と、年輩の一人が言い、
「わからぬぞ」と、誰かが応じた。
ある思いが香織の頭をかすめたのは、このときである。それは、蝦夷地へ行きたいという思いである。放たれた矢が突き刺さるように、礫が胸にとびこむように、その思いは彼の中に落ちこんできた。
蝦夷地へ行きたい。いや、行かねばならぬ。なんとしてでも菊のそばからはなれねばならぬ……。
思いは、たちまちふくれあがり、あきらかな願望とかわって、ここに来るまでのあいだも彼の頭を占めつづけてきたのであった。
香織は、ふととまどいを感じた。この夕刻、蝦夷地行きを熱望しているのは、佐竹の家中では香織一人くらいのものであろう。よそ者にでもなったように、なにか落ちつきが悪かった。
三上秀之助は、この日は非番であった。大事が持ちあがった際なので、他出しているかもしれず、先客があるかもしれない。客があるようなら、香織は秀之助に会わずに帰るつもりだった。
案内を乞うと、小者が取りつぎに出た。役向きでなんどかこの家に来たことがあるので、たがいに顔見知りである。客もなく、秀之助は在宅だというので、香織はほっとした。
「折り入って、お頼みしたいことがあって参った。お取りつぎを願いたい」
小者は奥へ引返すと、まもなくもどって来て、香織を座敷に案内した。
秀之助は居間にいたらしい。香織はすこし待たされたが、やがて秀之助が座敷にやって来た。
色白で恰幅のよい初老の支配目付である。温和な男だが、四人いる支配目付のなかではいちばんの器量人だと香織は思っている。舅の藤右衛門が長く秀之助の下で働いていた関係からか、香織の仕事ぶりをみとめてのことか、秀之助のほうも香織に目をかけてくれていた。
秀之助は香織と対座すると、おだやかにたずねた。
「折り入っての頼みとはなにかな」

「蝦夷地です」
「蝦夷地？」
「公儀からのお達しを、ごぞんじではないのですか」
「それは聞いた」
「お役所からも何人か蝦夷地へ行くことになるのでしょうか」
　秀之助は香織の顔をさぐりながら答えた。
「そういうことになるであろうな」
「では、そのなかにわたくしを加えていただきたい。お目付から御重役方に推輓(すいばん)をねがいます」
「それはまた……」
　秀之助は語を切ると、
「蝦夷地へ行かせてくれと申すのか」
「そうです。ぜひに、です」
「なぜかな」
「お家の大事、国家の大事、かようなときこそ、身命を投げ出すのが男子というもの……」
　香織には、自分のことばがそらぞらしく聞えた。自分がしゃべっているようではない。遠い舞台から聞えてくる下手な役者の、下手なせりふのようである。
　香織とて、主君を思う気持がないわけではない。忠誠心にかけては、他にひけはとらないと自負している。しかし、いまの場合は、ひたすら蝦夷地へ行きたいだけなのである。
　秀之助の表情には変化がなかった。心もち目を細めて香織を見守っていた。
「藤右衛門どのも承知のことかな」
「藤右衛門には、これから話します。藤右衛門もよろこびましょう」
「おぬし、跡つぎはまだであったな」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com